

文化 第八十卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷
平成二十九年三月二十五日発行

鈴木岩弓教授の業績と学風

木
村
敏
明



鈴木岩弓教授の業績と学風

木村 敏明

本学大学院文学研究科、人間科学専攻宗教学研究専攻分野および実践宗教学寄附講座の鈴木岩弓教授は二〇一七年三月末日をもって定年によりご退職なさいます。鈴木先生はご専門の宗教民俗学分野におきまして大きな足跡を残され、学会に多大な貢献をなさいました。また、副研究科長を務められるなど文学研究科の運営にも携わってこられました。近年では実践宗教学寄附講座の設置や運営にその手腕を発揮され、文学研究科の特色を生かした社会貢献活動を先頭に立って指揮されてきました。ここに先生の長年のお仕事を振り返り、ご紹介させていただきます。

先生は一九五一年八月に東京でお生まれになり、一九七七年に東北大学文学部哲学科宗教学・宗教史専攻を卒業されました。教養部時代にはサークル「アドベンチャークラブ」を立ち上げ、仲間たちと共に山登

りや海外旅行などにうちこんだと聞いています。先生は常日頃「誰もやっていないことをやれ」「面白くなければ研究ではない」と学生たちに教えられてきましたが、そのような先生のフロンティア精神はこの時代に培われたものと言えるかもしれません。

学部卒業後、先生は同年四月に東北大学文学研究科博士課程前期二年の課程に入學されています。当時の宗教学・宗教史専攻では楠正弘先生、山折哲雄先生が教鞭をとっておられ、鈴木先生は両先生の指導のもと飯豊山信仰について研究を行いその成果を修士論文にまとめられました。一九七九年三月に同課程を修了されると同年四月には同研究科博士課程後期三年の課程に進學されています。一九八四年同課程を単位取得退学後、四月からは島根大学教育学部助手に就任なさいました。その後一九八四年に同大学講師を経て、

一九八七年に同大学助教授に昇任されています。先生が宗教学・宗教史講座の助教授として東北大学文学部にいらっしゃったのは一九九二年のことで、その後一九九七年に教授に昇任されています。

東北大学文学部・文学研究科にご在職の間、先生は大学の運営に多大な貢献をされ、教務委員長、研究広報室長など数々の役職を務められています。また、今でも多くの学生が受講している「公務員講座」の実現に向け先生が奔走されていたこともここに特に記しておきたいと思います。二〇一三年四月から二年間は東北大学教育研究評議員、文学研究科副研究科長を務められ、本学および文学研究科、文学部の研究教育の向上に尽くしてこられました。また、文学研究科東北文化研究室では長年にわたって幹事としてその活動をけん引されました。二〇〇五年に同研究室主催で日中韓の研究者を集めておこなわれた国際シンポジウム「山と神」では企画実施において大いに活躍され、東北文化研究室で今でも語り草となっているほどの充実した会とするために多大な貢献をなさいました。

学外においても鈴木先生は目覚ましい活躍をされ、学会や社会に貢献をされてきました。印度学宗教学会会長、東北民俗の会会長をはじめ、日本宗教学会では常務理事、庶務委員、情報化委員会委員、プログ

ラム委員、学会賞選考委員などを歴任され、二〇〇三年から四年にかけては国際宗教史会議 (International Association for the History of Religion) の第十九回世界大会組織委員会も務めておられます。日本民俗学会でも評議員や編集担当理事などの要職を務められ、日本の学術研究の発展に寄与されました。また、二〇〇六年には日本宗教学会、二〇一〇年には日本民俗学会という大規模学会の学術大会をホストとして成功裏に開催に導いたほか、二〇一三年に東北大学で開催された国際学会アジア太平洋バストラル・カウンセリング学会の学術大会でも副大会会長としてその手腕を発揮されました。また、先生は仙台市史、青森県史、原町市史、岩沼市史、相馬市史など様々な自治体史の委員、国立歴史民俗博物館の運営会議委員としても社会的に活躍されてきました。

先生は日本における宗教学の第一人者として国内外に広く知られています。とりわけ葬送墓制や死者供養など死をめぐる諸問題の研究、流行神の研究、柳田国男や堀一郎を中心とした民間信仰理論の研究では学術的に大きな成果を挙げ、宗教学の発展に寄与されてきました。また、東日本大震災以降にはそれらの研究を応用した社会貢献活動にも力を入れられ、実践宗教学寄附講座の設置、「臨床宗教師」養成プログラムの

開発実施に尽力されています。

先生の数々のご業績のうち第一に挙げるべきは前述の葬送墓制や死者供養などに関わるものだといえるでしょう。先生の問題意識は、戦後の日本社会において「エイエ」が制度的にも観念的にも崩れていく中、「エイエ」を基盤とした先祖祭祀がどのように変化を遂げていくかという点にありました。このようなご関心から、現代日本の死をめぐる多様な問題に取り組んでこられています。

中でもいくつかの霊園におけるお墓の悉皆調査をもとにした死者祭祀の経年変化の研究は非常によく知られた重要な研究であるといえるでしょう。現代社会において人々の死生観が変化しつつあるということは従来から指摘されてきましたが、そのような議論の多くが筆者の経験に基づき印象論に流れがちでした。先生はその壁を人々の造墓行動に注目することで乗り越えようとなさいました。すなわち、造墓行動にはそれぞれの造墓者の死生観が反映されているはずであり、お墓の形態や銘文を数多く集めて分析することで、死生観の変化についてマクロな動向を知ることができるのではないかと考えられたのです。『東北文化研究室紀要』（第三八集一九九七年／第四〇集一九九九年）に二度にわたって掲載された論文「墓が語る現代」は仙台

市における公営と民営の公共墓地を対象とした悉皆調査による研究であり、現代社会における死生観や墓制研究の金字塔として広く知られています。また、先生は同様の手法での研究を海外でも応用できるのではないかとアイデアをお持ちで、実際にいくつかの地域でご自身やその影響を受けた海外の研究者による調査が始められています。

お墓だけではなく他の対象を用いて死生観を捉えようという研究も国内外でなされています。例えば仏壇に納められた「位牌」、家の中に飾られた「遺影」なども生者が死者を感じ、想い、そこに関わっていくための媒介として注目されて調査を行い、その機能や変遷について数々の論考を発表されています。また、雑誌『中央公論』における記事の悉皆的な調査から死生観の変遷を明らかにしようと試みた論文『中央公論』にみる『死』の扱いの変化』（『論集』二〇〇七年）もまた斬新な方法論で注目を集めた研究です。

死者が祀られる霊地、霊場とりわけ山に関わるその研究も先生が大学院生時代から取り組んでこられた重要なテーマだといえます。飯豊山、伯耆大山、因州摩尼山、恐山など様々な地域で先生は実地調査を行い、数多くの業績を残されています。中でも山形県などに広くみられる「もり供養」の信仰行事については

長期間にわたって継続的に調査をなさり、数多くの業績を発表されています。これらの研究でも先生の関心はそれらの信仰行事の現代的意義や変化に向けられていました。「霊園化する『霊場恐山』―近年の動向から」（『東北民俗』第四七輯二〇〇七年）にはそのような先生のご研究の特徴をはっきりうかがうことができず。

宗教現象をそのような生成変化の場面においてとらえようとする先生の志向をはっきりと示しているのが、「流行神」をめぐる一連の研究だと言えるでしょう。「流行神」とは夢のお告げなどで突然出現した神仏が霊驗あらたかなことが判明しその後から広く参詣者を獲得する現象を指し、従来江戸時代などに一時的にブームとなった神仏への信仰を表すために用いられてきた用語ですが、先生はこれを現代的な宗教現象に適用されその研究を進めてこられました。特に広島県府中市の「首なし地蔵」の事例をとりあげ、多様なメディアの関りの中で信仰圏が拡大していく様子を丹念に分析した『「首無地蔵」信仰の展開構造』（『宗教研究』第六九巻三輯一九九五年）は新たな研究分野を切り開いた先駆的研究として、その後の学会の研究動向に少なからぬ影響を与えています。

また、先生は東北大学宗教学研究室の伝統の一つと

いえる「民間信仰」概念の彫琢にも力を入れてこられました。「民間信仰」概念は宗教学の主要な概念装置であり、現在では日本のみならず東アジアの漢字使用圏で広く用いられていますが、その内容や範囲については長らく曖昧なままにとどまってきました。鈴木先生は姉崎正治にはじまり、柳田国男、堀一郎に至るその概念の系譜を丹念に振り返りつつ、組織的宗教の「変化、曲解、混交」としての民間信仰概念の明確化とその意義の追及につとめられてきました。その成果は「堀宗教民俗学と『民間信仰』（『論集』第三〇号二〇〇三年）などの日本語論文に加え、韓国語（『日本民間信仰概念의 成立과 展開』『韓國民俗学』二九号一九九七年）や中国語（『民間信仰』概念在日本的形成及其演变』『民俗研究』一九九八年第三期）でも発表され、東アジアにおける斯分野での研究交流の進展に貢献されています。付言すれば、鈴木先生は韓国、中国、インドネシア、モンゴルなどの研究者と深い交流を続けられており、とりわけインドネシア大学や東南大学では何度にもわたって集中講義を行っています。

近年の先生のご活躍については、東日本大震災以降の動向に触れないわけにはいかないでしょう。先生は震災直後から、かねてよりの知己であった医師の岡部健氏、谷山洋三氏（現、東北大学文学研究科実践宗

教学寄附講座准教授）らと協力して、宮城県内の様々な宗教者たちによる超宗教・宗派的な被災者支援組織「心の相談室」の立ち上げに関わり、その後も事務局長としてその活動を支えてこられました。国立大学法人である東北大学が事務局として中立的立場で諸宗教の間に立つことで、様々な宗教が手を取り合い、自分の宗教の布教ではなく困難の中にある人々の支援をおこなうというこの枠組みは学会のみならず多方面に大きな反響を呼びました。

またこの活動の中から、さまざまな信仰をもった人々の宗教的ニーズに適切に答えることのできる人材「臨床宗教師」養成というアイデアが生まれると、先生はそれについての基礎研究と養成の場を東北大学文学研究科内に作ろうと奔走されました。その活動が実を結び、二〇一二年から東北大学文学研究科ではじめての外部資金による寄附講座「実践宗教学寄附講座」が開設される運びとなりました。鈴木先生は同講座の兼任教授を務められ、その維持と発展にまさに全身全霊をもって打ち込んでこられました。そのような先生のご努力は次第に実を結びつつあり、二〇一七年一月現在、一〇回の臨床宗教師研修が実施され、一五二名の宗教者がそのプログラムを修了しています。また同様のプログラムは他大学にも広がり、全国

規模の日本臨床宗教師会や六つの地区ブロックごとの会もつくられました。各地の病院などで雇用される臨床宗教師も増え、活躍の場も年々拡大しつつあります。

先生は実践面でこれらの活動を支えられただけでなく、これまで日本各地や東北で積み重ねてこられたご研究を存分に生かし、活動の意義や課題について理論的に考察されてもきました。そのような研究としてはまず、東日本大震災の被災地における死者の問題をあげる事ができるでしょう。震災で亡くなった方々の仮埋葬をめぐる問題（「東日本大震災の土葬選択にみる死者観念」座小田豊・尾崎彰宏編『今を生きる 1人間として』東北大学出版会、二〇一二年）や慰霊施設（「東日本大震災による被災死者の慰霊施設」村上興匡・西村明編『慰霊の系譜―死者を記憶する共同体』森話社、二〇一三年）怪異譚（「震災被災地における怪異の場」『口承文芸研究』第三八号、二〇一五年）などは、震災後の被災社会における宗教的ニーズをこの地域で長年研究されてきた先生ならではの視点から明らかにされたものです。

鈴木先生はたいへん気さくで誰からも好かれ、どこかの学会に出かけても自然と先生を中心に様々な大学の教員や院生が集まり人垣ができていました。先生の講

義はいつも平明な言葉を用いつつも問題の本質を鋭く突いており、ユーモアに満ちた先生の語り口に教室は大勢の学生の笑い声にあふれていました。先生のご研究とお人柄を慕って宗教学研究室へと入学進学の学生も多く、そこからは数多くの優れた社会人や研究者が世に巣立っていきました。このようにいつも研究室の活動の中心にいた鈴木先生がご退職されることは、寂しさを通り越して想像すらかないあり得ない出来事に思えます。一方、先生の研究や活動の一人のファンとしては、もともと研究科や研究室のような窮屈な枠に収まらない先生の本領が、新たな活躍の場で存分に発揮されることが楽しみでもあります。先生のこれまでのご指導に感謝を申し上げます。今後のますますのご活躍とご健勝をお祈りいたします。